広領域分野資料の横断的アーカイブズ論に関する基礎研究

A Fundamental Study on the intersectional Archives Theory for the Multidisciplinary Objects

静岡大学情報学部 八重樫純樹

Jyunki. YAEGASHI The Faculty of Information, SHIZUOKA Univ.

〒432-8011 浜松市城北町3丁目5-1 静岡大学情報学部

The Fac. of Information. SHIZUOKA Univ. 3-5-1. Jyohoku-Cho. Hamamatsu. Sizuoka. Japan

[あらまし]

社会の情報技術普及と高度化は急速であり、かつ社会の情報空間は世界規模となってきている。しかしこれら技術進展に比較し、文化財をはじめ社会的共有資料としての情報資源構築が円滑に進んでいない。これは社会共有資料管理・運営において情報記録・管理の基本的な問題解決と普及がなされてこなかったことに起因する。世界のコンテンツは Dublin Core活動に見られるよう標準化の方向に動いている。本論はこれらに早急に対処し、かつ社会共有情報資源構築の基盤であるアーカイブズ論について、分野横断的アーカイブズ論としての可能性とその端緒を探るため、歴史的資料を中心に資料論の整理を行った。

[Abstract]

Despite a rapid growth of the social interest in information and related technologies, Japan falls far behind countries in constructing the social information infurastructure such as databases. Vast majyority of objects with educational, academic, and/or cultural importance are left unexplored.

This study aims to establish a basis for the intersectional Archives Theory of information conveyed in these previously unexplored multidisciplinary objects. We demonstrate the feasibility and characterisitics of systematic modeling of these objects.

Our approach here is based on the modeling of information activity as a communication activity, and objects concerned as the media for this activity, thereby revealing the characteristics of interdisciplinary information activities.

1. はじめに

社会一般の情報化の動向は加速的に急速であり、あらゆる社会分野を巻き込んでいる。これは世界的傾向であり、多少のことはあれ、国内のこの傾向は今後も続くであろう。数年前からすでに社会は情報化の動向にあり、この社会情報化の基盤整備が論議されていた。この課題と目標として、

- 社会情報技術基盤の形成
- 社会情報体制基盤の形成

の二つが必要であるといわれおり、それらを中 心に議論が進められた。しかし、社会情報化の 基盤をなす社会情報資源構築基盤の形成につい てはあまり触れられておらず、上記二つの基盤 が整備されれば、社会のなかから自動的に生成 されてゆくものと考えられていたのではなかろ うか。これは、その後各省庁や自治体で遂行さ れてきたメディアやコンテンツ構築および情報 関係諸研究に関する諸政策や動向の上から推測 できる。しかし、現状にいたり上記の技術基盤 は米国製のインターネットとウインドウズに完 全に席巻されたが、確かに社会に普及した。ま た、ここ数年、社会論はコミュニケーション論 やメディア論が盛んであったが、現実の社会実 学としての社会情報体制基盤の整備はこれから 問題を探り、どうするかという状況にあるもの と認識する。

また、情報技術(IT: Information Technology)の社会の速効的な効果的としては、欧米との広域性の観点から経済・流通分野や経営管理分野が考えれ、現在、E-Commerce等の問題が論議されている。しかし、ITが社会に長期的に定着するためには経済活動コンテンツのみならず日常の社会生活や文化、教育、学術、教養等の知的な社会共有情報資源としてのコンテンツの整備が不可欠である。上記の社会情報基盤整備政策決定の上では自動的あるいは小手先で解決する問題であると考えられたのかもしれない。

社会諸資料の社会共有情報資源としてのデジタルコンテンツやデータベース作成の条件としてコンピュータ可読資料となっていなければならず、前提としての資料情報の整理と管理がなされていなければならない(デジタル入力容易

性と資料の整理前作業(資料内容記録や索引情報、資料整理の管理構造等))。社会共有情報 資源の対象となる各種社会分野の資料管理体制 と業務がそのように整えられ、すでに多くの蓄 積が社会的に累積されているとするなら上記の 基盤整備に多少のテコ入れで社会の情報化は円 滑に進捗するであろう。

問題はここにあり、国内において比較的資料 情報整理と管理が業務として定着しているのは 貸借関係が主な業務となっている分野、例えば 図書館、特権(特許)、金融・財産管理関係等 である。しかし、多くの分野では資料そのもが 一過件で棄却対象であったり(主に行政文書関 係)、資料保存が重要な意味を有しているので 、資料そのものの保存に力点がおかれ専門家に 管理が委ねられ、資料情報記録・管理が最小限 にしかなされていなかった分野(主に文化財や 博物館資料等の資料)等、各種存在する。国内 においても、特に文化財や博物館資料の世界で は、欧米同様に資料一般の情報記録・管理の社 会的設定と一般的方法論の確立についての重要 性は言われていたが、上記のように社会の学術 諸分野単位、あるいは専門領域や専門機関単位 の狭い範囲で遂行されてきており、一般化につ いては殆ど触れないできており、現状を迎えて いる。しかし、世界の情報化動向はきわめて加 速的に進展しつつあり、情報技術基盤はインタ ーネットの世界的広域化と社会諸分野への急速 な進展・普及により、社会共有情報資源やコン テンツの量が国際的な立場を左右する状況に至 りつつあり、この解決にはどうしても資料の情 報記録・管理の問題抜きには解決に至らないで あろう。これはまさにIT以前の社会共有情報 資源構築体制基盤整備の基礎である。

本研究は上記視点から一つの分野や領域にとらわれず、人間・社会・自然等、多様な活動の実態(情報活動行為)を反映し生産される諸資料群を対象に、そのアーカイブズとしての情報・記録管理の視点として、資料情報のアナロジーと差異の分析を通してモデリングし、社会資料の情報化方法論の基礎を創ることを目的とするものである。現実社会で生成・利用される社会資料群は現実社会において広範に共有知識情報を得ることが可能であり、何らかの収束の方

向性が得られる(これらも時間とともに歴史的 資料となるが)。しかし、時間性を含む歴史系 資料群は資料そのものが生成・利用された空間 認識から、また時間性により物理的、化学的ダ メージを受け、多くの社会的情報が壊失されて いる。この課題を中心に据えて、資料群の分野 横断的アーカイブズ論に関する考察を行うもの である。

2. 資料群の情報概念整理と情報化過程

社会的資料群はもともと学術、教育、産業等、社会や自然の諸活動(情報活動行為)で生成・利用される諸活動の目的であり、過程であり、結果である。これらの情報化における情報モデリングと記述方法論として、資料群そのものと生成される背景空間の構造(Structure)と文脈(Context)の情報認識・記述が要点である。そして技術と人間の諸活動との関わりおいてはデータが基本的な要素となる。この認識と要点抽出の基盤的として、情報概念について以下整理する。

情報概念については従来から、

- (a) データ概念と情報概念の区分が明白でない理工学系(特に古典的なシステム工学やコンピュータ科学分野の一部にまだ見受けられる)。
- (b) 人間-自然の活動におけるすべての信号 -認識事項。社会学系では人間-自然活

↓ ↑

動のすべての森羅万象におけるパターン の差異を情報として定義している(文献 (4)(6)(23)(24)等]

の二つのアプローチが存在した。しかし、人間諸活動におけるとITとの整合システムを前提とした人間ー機会系の組織化とそれらの融合的な創造活動を情報システムシステムとして考え、また情報システム構築をその立場において考える場合、上記二つのカテゴライズでは狭小過ぎる((a)の場合)かあまりにも取り留めがなさすぎる((b)の場合)。この立場から、文献(9)を参考にし、要約的に示すと、

(c)情報はヒトの自己、外界の物事に対する 意味の感性、認識であり、データはこれ らを形式的、体系的に記述したもの(二 次的資料群)。

といえるであろう。情報システムとしての仕様が決定され、あくまでもITを中心に情報システムの一部分設計を考える場合、いまだ(a)のカテゴライズでも機械系の効しかし、(b)の規点から有効かもしれなが設定され、稼働しんのカテゴライズはよいではかることかを考える場合であり、森羅万象の中宙論でいては、問題やであり、森羅万象ではないては、問題やであり、森羅万象ではないては、問題やであり、なると等なる。(c)の概念規定につて「諸・1として示す(実世界における資料群はこでは上記(c)との対応では一次資料群であ

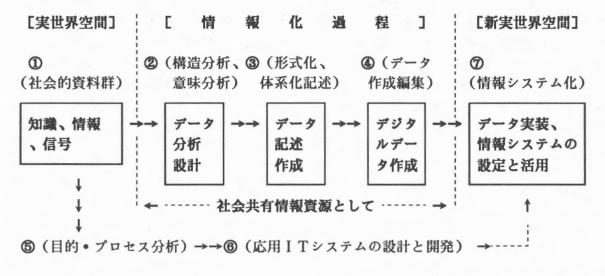
①知識 (Knowledge) :体系化された情報 (*社会的認知、社会的インフラの進んだ普及情報) ↑↓

[実世界] →→ ②情報 (Information): 人間の物事に対する意味感性、認識 (*社会における情報システム、情報処理行為の基本)

③データ (Data) :形式化された信号や情報 - 二次的資料群 - (*自然科学、資料を中心とした諸人文学 (考古学等))

↓↑ ④信号(Signal) :自然や本能、そして機械レベルで検知可能な、 変化の差異パターン

Fig. 1 情報概念の階層性



- (注) ①から⑦への変換系が情報システム化
- ⑤、⑥、⑦が機械制御系の設定過程
- ②、③、④が基本的データ生成過程

Fig. 2 情報化過程のモデル

る。しかし、以降、本論では一次資料群は資料群、二次資料群はデータとして記述する)。また、実世界の情報化過程におけるデータの位置づけについて、Fig.2に示す。

3. メディアとしての資料群

3.1 資料群生成過程とメディアモデル

社会的資料群とは実世界における人間ー自然 界諸活動の経過か結果として具体的に生成され たものである。したがって、それらが生成され る実世界空間の信号あるいは情報が具体的に記述されているか、内包されている存在である。 人間ー自然界諸活動における一つのまとと、事 象はそれが生じる実世界空間の意味におよい 事象として認識され実世界に作用する。また事象として認識され実世界に作用する。また事象として認識され実世界に作用する。また事像 そのものは何らかの人為的か自然的な組織体構造(プロセスの集合体)が存在し、それらが偶然か自然あるいは人為的に内部的機能を遂行して生成される一つの結果と考えられる。

したがって、資料群個々は事象の結果あるい は生成過程においてそれぞれ生成されるもので あり、これらは事象が生成される組織構造体機 能の一過程あるいは結果の生成体であり、実世 界空間と事象のそのものの意味か背景文脈

(Context)の意味を内包あるいは表層に記述された存在である。つまり、資料群個々にはそれが生成された実世界空間と事象の文脈が内包あるいは表層に記述されており、そして事象が生成される組織構造体(Frame)の一部に位置づけられ、その機能の意味が内包あるいは表層に記述されている存在であると考える。

この事象を生成する組織構造体の単位をプロセスとし、これらプロセス群の連続的に生起され、その活動で事象が生成されるものとし、組織体構造活動の単位が一つあるいは複数プロセスの生起と活動であるとし、がその資料群個かの情報の授々として生成され、機能した結果ができよう。これはとりもなおさずのよう。これはとりもなおさずできよう。これはとりもなおさずできよう。これはとりもなおさずである。また、質料一つ一つは事象を生成する組織構造体におけるプロセス間通信のメディアとしてモデル化できよう。のまり、資料一つ一つは事象を生成する組織構造体におけるプロセス間通信のメディアによって成立していると見る事ができよう。以上を図式化すると、Fig.3のように示せる。

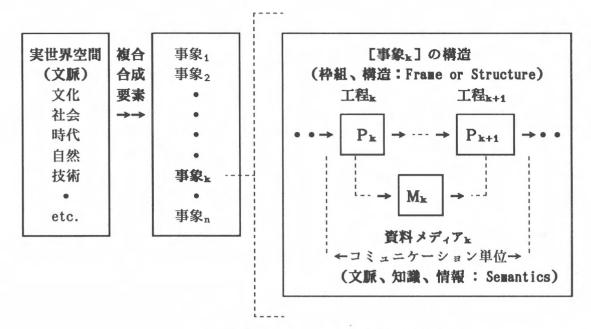


Fig. 3 メディアとしての資料

3.2 時間性情報と資料メディア

現在時点の実世界空間は、実は時間が経過 すると"過去の実世界空間"となり、新たな実 世界空間に推移し、新たな事象群と資料メディ ア群が生成され、時間は止まることがない。そ して現時点の実世界空間は常に過去の実世界空 間の累積の上に成立している。資料メディア群 も同様である。ただし、ヒトは常に現時点で生 活せねばならず、そして次に時間的推移する未 来実世界空間の生活可能性追求が現時点の生活 の活力である。現時点の実世界空間が過去の実 世界空間の累積の上に立脚しているとはいえ、 ヒトは常に未来空間に生活の視点を置く。 したがって過去の実世界空間で生起し、生成 された多くの事象群と資料メディア群は、基本 的に現時点と未来実世界空間に必要な対象が選 別され、忘却あるいは棄却・劣化・消滅してゆ くのが自然ともいえる。このため時間は事象群 と資料メディア群にとって強烈な雑音空間とい え、忘却や劣化・棄却・消滅の度合いは資料メ ディア群の時間経過において、置かれた自然環 境や素材のよっても異なるが、ほぼ指数関数的 である。以上から事象群および資料メディア群 の情報性質を考える場合、強烈な雑音空間であ

る時間経過における諸性質の考察が必然である。したがって、これらを、事象が生起された過去の空間を事象空間とし、資料メディアが現在まで経過してきた空間を経緯空間とし、現時点の実世界空間を現在空間とし、資料メディアが経過した異なる三つの空間別に考察するモデルを、ここでは資料メディア群のライフサイクルについて、時間経過との関係をとしてFi.4 に示す。なお資料メディアを媒介として研究する考古学、歴史学、民俗学、美術史学等が対象としている諸資料メディア群の諸性質とこれら分野研究の特質について、文献 [((16)(19)(26)(28)(29)]等で詳しく示した。

現時点における資料メディアと時間性を有した資料メディアとの相違は時間性を有するか、否かである。つまり、経緯空間の存在有無あるいは経緯時間とそれが置かれた環境、時間、素材の問題であり、現時点社会で生成される資料メディアと過去の実世界空間に置いて生成された資料メディアとの差異は経緯空間の存在の問題である。ここをどのように理解、考察するかが根本的な問題解決の基盤である。



Fig. 4 時間経過と資料メディアのライフサイクル

4. 資料メディアのコミュニケーションと メディアとしてのデータ

4.1 資料メデイアのコミュニケーション 久保は文献(8)で社会一般のコミュニケーション分類の中で、A型からF型に分類している。この中でアボリジニイ研究における諸資料を 発信者不明のF型コミュニケーションとして分

類している。現代社会資料メディア群と歴史系 資料群の対比を明確にすることと、また、歴史 一社会の諸活動の多くはコミュニケーション活 動としてとらえる事が可能であり、資料メディ ア群はこれら諸活動の文脈情報(メッセージ) を記述・内包するメディア群であるのである。 歴史を解釈する歴史学は歴史系資料メディア

。この中でアボリジニイ研究における諸資料を 歴史を解釈する歴史学は歴史系資料メディア 発信者不明のF型コミュニケーションとして分 群をもとに、そのメッセージ解読の行為の歴史

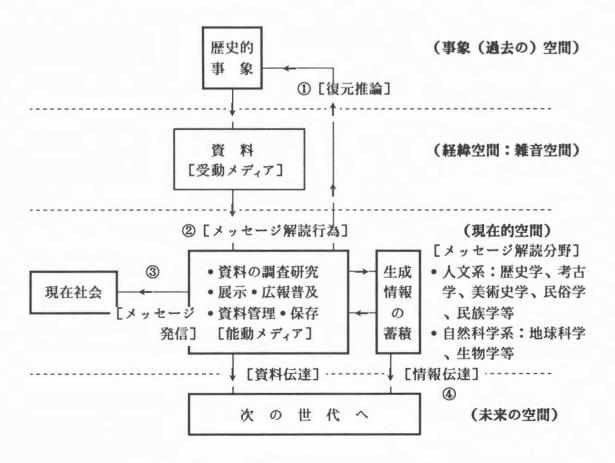


Fig. 5 時間マクロコミュニケーションモデル

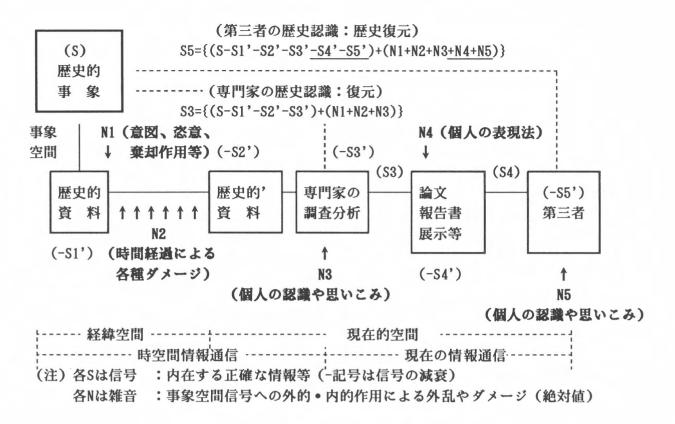


Fig. 6 歴史コミュニケーションのモデル

コミュニケーションであり、またキャッシュカード(メディア)で金を出し入れする行為は何らかのコミュニケーション行為でもある。ここから多分野資料メディア群を共通客体化の基盤で考察する上で、メディア群としてモデリングする。情報を整理するため、三つの時空間別に再配置し、歴史系資料メディア群をもとにしたコミュニケーションモデルをFig.5とFig.6に示す。

Fig.5はミュージアム活動を中心とした社会的能動メディアとしてのコミュニケーションモデルとして、Fig.6は個々の歴史系資料のコミュニケーションモデルとして示す。

4.2 資料情報のカテゴライズと情報記録 管理データとしての諸問題

文献 [(2)(5)(8)(14)] 等で歴史系資料メディアの基本的情報を 4 項組として示した。つまり、全ての資料メディアをEとすると(1)式で示される。

 $\langle E \rangle : = \langle T \rangle \langle S \rangle \langle 0 \rangle \langle C \rangle \cdots (1)$

(T:時間、S:地理的空間、O:対象内容 、C:間接的な関連情報)

Fig. 3、Fig. 4、Fig. 5をもとに、以下(1)の各要素について考察する。
(1) T:時間

歴史系人文学研究においては、時間は研究そのものの場合が多い。また、歴史学、考古学、 民俗学、美術史学等分野や研究対象において、 時間単位の問題(曆(太陽歴と陰曆)、元号、 時代等)、時間間隔の問題(年、年代、世紀、 時代、時期等)さらに相対時間 - 絶対時間の問題(歴年代と時代、編年や様式年代等)がある。それぞれの分野、研究対象により個々に使用しているが、現在は西暦年が世界的基準であるが、その文化固有の考古学資料等はそれに相当しにくいものと考えられる。

また、資料情報管理としてのアプローチは、 各分野研究における専門資料として考える場合 と、社会一般資料として考える場合がある。そ れぞれの専門分野において資料記述が一般化、 標準化されていれば問題は少なく、一部文書関 係には存在しているが、人文学系においてはこれらのための資料論が存在していない。したがって専門資料、社会資料両者の側面からの記述としてはFig. 4の資料ライフサイクルの観点が合理的と考える。つまり、基本的に

- 事象空間 (Ta) : 発生に関する時間集合
- 経緯空間 (T_p) : 来歴に関する時間集合
- ・現在空間 (T_n) : 資料化の以降の時間集合の3っつの側面から記述する方法である。これは、(1) における他のS、O、Cにも普遍する事柄である。

(2) 地理的空間: S

地理的空間においても時間同様多くの概念が存在する。位置としての点情報、交通など線として情報、また地域や文化圏などの面情報、また地質学等の層としての情報の捉え方が存在する。さらに、緯度・経度のように絶対座標系、海岸線や河川、等高線等の自然地形、道路、建造物、遺跡、市街等の人工物、行政界や地名等の相対的名称など。

これらの多くは時間と共に推移・変化している、現在の地形は百万年、千万年、億年の単位の研究には使えない場合もあり、また歴史性を含む問題は歴史地理学の研究対象そのものの課題で有る場合が多い。つまり確定不能な場合が多い)。かつ分野や研究対象により、その必要な地理的属性は異なる。かつ時間経過と共に推移・変化しており、自然系、人文社会系の対象研究時代によって異なる。時間同様に三つの空間が存在するが、ここは現実的には現在空間から出発し(住所や座標値、海抜等)、事象空間、経緯空間については記述可能な情報から順次記述してゆくしかない。これは対象分野で決定して行くべき事項であろう。

(3) 対象内容: 0

すべての"もの"資料が対象であり、かつ分野によって資料に対する考え方が異なる。基本的に文字記述された、あるいは何らかの間接的な記述資料の存在する資料群と物体としての"もの"資料群に分かれよう。文字記述資料も生成の時間性が違いものほど(歴史文書等)情報確認に専門性が必要となってくる。

また物体としての"もの"資料群も専門分野 や対象によって異なるとはいえ、基本的に自然 史関係と人文社会関係資料で状況が大きく異なる。自然史系は比較的分類学が進んでおり、かつ標本記録の考えが伝統的に遂行されてきている。しかし、人文社会系"もの"資料群に関しては我国では殆ど情報記録管理のための記述に関する標準化の指向がなされていなかった。これは人類活動の結果生成された多様な資料群であり、その体系化は人類活動そのものが体系化不能であるのと同義であり、困難であることは確かである。

しかし、資料群がその分野の専門家の世界にしか必要なかったことと、専門家あるいは分野の研究視点からの記述方式によりすぎていたことによる。専門分野が一般化されていれば解決の方向性があったかもしれない。が、学説は専門家によって異なり、新資料出現によって大きく変わる専門分野では研究情報を中心とした記述方式の収束の見通しは立たない。また、文化の社会的コミュニケーションメディアであるに関わらず、社会化の視点を伝統的に欠いた結果である。

これは結果であり、現実であるが、社会的コミュニケーションメディアとしての視点から再アプローチが必須である。つまり、各専門分野の文脈理解と知識はどうしても必要であり各専門分野とのコラボレーションが必須ではあるが、社会的メディアの情報管理の側面から管理・索引情報記述の問題を再整理から出発しなデジタルコンテンツとして画像や音声等、デジタルカイブズを容易に受け入れられる状況であるが、索引、管理情報については、特に文化財や歴史系資料に関しては、今後の問題である。

(1)で示した3空間分離した記述の可能性について検討を加える(現在社会資料:事象空間=経緯空間=現在的空間)。

(4) 間接的関連情報: C

主に資料に関連した調査報告書、履歴書(カルテ)、論文、所在や管理機関等情報を対象とする。情報化において各資料対象や分野で一番進捗し、かつ基本となるのがここである。これは文献データベース、所在データベース等として構築・運用されている。理系、人文社会系それぞれデータ内容、質、量が異なる。これら分

野それぞれの文献データベース内容調査により 分野の研究体制や内容等の文脈が見えてくるも のと考える。この比較研究も(3)の研究にお いて必要事項となる。これは今後の課題である

5. まとめとしての考察

はじめに示したようにIT(情報技術)の社会的普及や技術開発とその応用は急速である。しかし、政府の政策にも関わらず、情報化社会の中味(コンテンツ)としての社会共有情報資源の構築と普及は遅々としている。特に我々社会と文化の基盤をなすべき、全国に散在・管理されている文化財をはじめ各種文書資料や"もの"資料のデジタル化と社会共有情報資源化は未だ軌道に乗ったとはいいがたい。

この状況は、はじめおよび4章4.2、(3)でも指摘したように社会的アーカイブズ論への無関心さと技術指向に偏した社会の情報化研究活動、及び社会が専門家集団に資料管理を全面的に委託した結果とも言えよう。一方、世界の資料デジタル化の動向は急速であり、サイバー空間が世界規模で展開され、データファイルの標準化はHTMLからXMLの方向へ動き出している。また、資料アーカイブズに関しても

Dublin Core にみられるように、急速に世界的標準化の方向にあり、今後のアーカイブズはこれを無視しては成立しない状況となっている。

この状況において、社会共有情報資源構築の基盤を備は基本的に社会的なアーカイブズ論の整備と普及である。技術が如何に普及し間と2000である。技術が如恵と時間と労力で介護を得ないのである(Fig.2の②、③過程でするを得ないのである(Fig.2の②、③過程の方法基礎論のが表しての成果物の生産に対しての成果物の生産に対しての成果物の生産に対しての成果物の生産に対したがれている場合を多と研究主体で物事の任に無関心な場合もあると、資料や情報の社会化に無関心な場合もといる。となるのは、近においても必要となる。これにおいても必要となる。これにおいても必要となる。

のため、時空間コミュニケーションとして歴史 的情報活動をモデリングし、資料群を資料メディア群として捉える視点と混在する歴史的専門 情報のデータ形成整理方法論として空間情報の 分離を4章で示した。

アーカイブズ方法論研究は、情報化社会の情報資源形成のための基本であり、情報化社会形成の上で最も基盤をなすものと考えるが、国内においては分野個々に、そして各分野の片隅で活動力点の焦点からそれた存在となってお動は分野個をである。これら活動は分野個である。これら活動は分野個である。また、特に人間活動痕跡で社会資料群全般を一つ視点から体系的間点が存在して自然が表現が存在して外野である。ただし、人間に基準化すること然に対する社会的視点が存在して外野である。ただし、人間に基準化することは活動を表現を一本化することは不可能であろう。

本研究は社会資料群全般を視野にいれ、社会的共有情報資源構築基盤としてのアーカイブズ論に関する基礎的方法論の研究を行うため、議論基盤としての資料群と諸研究領域活動について一般化の整理を試みたものである。本論を基盤とし、国際化が相当に進んでいる図書館情報関係専門家、また現在進行中の文書関係アーカイブズ専門家等のノウハウと知恵を注いで頂き、ミュージアム資料関係専門家等や専門分野関係者とコラボレートしつつこれらの問題について研究を進める予定であり、これら専門分野そして研究者、専門家とのコラボレーション活動が必須である。

ヒューマンコラボレーションシステム確立が 前提であるが、ここにおいてコラボレーション システムとしてのITの開発と活用は重要であ り、効果してくるものと考える。これは社会情 報収集や研究、知見交換の協議等において効果 するであろう。縄文土偶関連資料研究活動のツ ールとして現在、プロトタイプを研究開発中で ある。

《参考文献》

- (1)ソシュール(著)、丸山圭三郎(訳) 1981 『ソシュールの思想』 岩波書店
- (2)八重樫純樹、小林達雄、野口正一 1984 「縄文時代土偶の情報構造に関する基礎的考 察」国立歴史民俗博物館研究報告第3集 pp.251-273
- (3)ハーバーマス.j(著)、河上倫逸ほか (訳)1985 『コミュニケーション的行為の 理論』未来社
- (4)マクルーハン、M(著)、栗原裕、河本伸聖(訳) 1987 『メディア論』 みすず書房
- (5)八重樫純樹 1989a 「歴史的データの基本構造に関する研究」1989年情報学シンポジウム論文集 pp.115-124
- (6)吉田民人 1990『情報と自己組織性の理論』 東京大学出版会
- (7)八重樫純樹、倉田是 1991「事例データをも とにした情報検索実験例といくつかの課題」 国立歴史民俗博物館研究報告書第30集 pp.207-248
- (8)八重樫純樹 1991「歴史系支援情報処理研究 の課題」情報知識学会誌Vol.2 No.1 pp.9-22
- (9)八重樫純樹編著 1992『国立歴史民俗博物館 研究報告-土偶とその情報-第37集』国 立歴史民俗博物館 p.490
- (10)八重樫純樹 1993a「歴史系資料・事象情報 化に関する研究ーその経緯と基礎的課題ー」 国立歴史民俗博物館研究報告 第50集 pp.461-481
- (11)八重樫純樹 1993b「資料の視覚情報化」 『科学の目でみる文化財』アボック社 pp.121-149
- (12)八重樫純樹編著 1993『国立歴史民俗博物館 研究報告-共同研究「歴史学系研究支援情報処理の研究-カタチの情報のデータ形成・ 索引法-」-第53集』国立歴史民俗博物館 p.320
- (13) J. YAEGASHI 1994 FAN Experimental Study on Organization of Information Resources of Archeological Materials (Remains) Taking as an Example of Clay Figurines of JOMON Period in Japan J Proc. of 47th FID Conference and Congress J pp.760-764
- (14)八重樫純樹 1995a「歴史情報」『新版情報処理ハンドブック』 情報処理学会編, コロナ社 pp.887-892

- (15)八重樫純樹 1995b 「"もの"資料データベースとドキュメンテーション」 第一回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム 『美術情報と図書館』報告書 PP.43-52
- (16)八重樫純樹 1996b 「資料の情報定性論」 『人文学と情報処理誌』No.11 pp.24-30
- (17)八重樫純樹、高井健司、宮原健吾、千野裕道 1996「福岡県における歴史系資料情報化の 研究」『MUSEUM KYUSYU誌』第54号 PP.37-54
- (18)久保正敏 1997 『マルチメディア時代の起点』 日本放送出版協会
- (19)八重樫純樹 1998a 「人文系博物館における 資料ドキュメンテーションの諸問題」 情報 の科学と技術誌 Vol.48,No.2、PP.68-73
- (20)「土偶とその情報」研究会(代表:八重樫純樹) 1998 『土偶研究の地平-「土偶とその情報」研究論集(2)-』勉誠社、A4.P.419
- (21)八重樫純樹 1998b 「縄文土偶を例とした 資料情報化研究」 Academia 学術新報第174 号、PP.41-49
- (22)八重樫純樹 1998c 「土偶資料を例とした資料情報化研究(3)-広域土偶資料の情報体系調査とコンテンツ形成の基礎課題-」、『土偶研究の地平-「土偶とその情報」論集(2)-』 勉誠社(株)、 PP.9-28
- (23)伊藤守、小林直毅 1998 『情報社会とコミュニケーション』 福村出版
- (24)林進 1998 『コミュニケーション論』有斐閣
- (25)武井恵雄 1999 「情報教育におけるコミュニケーション」『情報教育シンポジウム論文集』 情報処理学会
- (26)八重樫純樹 1999 「土偶資料を例とした資料情報化研究(4)ー情報コンテンツ構築と資料研究の可能性ー」、『土偶研究の地平ー土偶とその情報」論集(3)ー』 勉誠出版(株) PP.13-42
- (27) 坂井知志、高橋信祐、高安礼士、武田国夫、 水嶋英治、八重樫純樹 1999 『博物館情報 論』、 樹村房、pp.17-27, pp51-60, pp.72-77, pp.145-153
- (28)「土偶とその情報」研究会(代表 八重樫 純樹)2000 『土偶研究の地平-「土偶とそ の情報研究」論集(4)』、勉誠出版社 (株)、A4.P438
- (29)八重樫純樹 2000b 「多分野資料の情報モデル化に関する基礎的研究」『2000年度研究報告講演論文集』情報知識学会、pp.29-32